

変動期のパーソナリティ形成

——『ポーランド農民』における生活史法——

高山 龍太郎

はじめに

近年、生活史を用いた社会学的研究に対する関心が高まっている。生活史などの質的調査法を多用した社会学の研究は、1920年代から1930年代にかけてシカゴ大学で最初の発展を遂げた。しかし、こうした研究スタイルは、その後衰退する。1950年代から1960年代にかけて、ラザースフェルドに代表される統計的調査法とパーソンズらの構造機能主義が社会学の中心を占め、数量化と理論化の傾向が一世を風靡する。生活史などの質的資料は、科学の基準を満たさないものとして排除されていった。だが、1970年代後半になると、社会における個人の具体的生活に対する関心が再び高まり、個人の内面をとらえる生活史が社会学資料として見直されるようになる。1978年に、国際社会学会に「伝記と社会学」という部会が創設され、同じ年の第9回国際社会学会で生活史アプローチに関するセッションが開かれた。現在、生活史を用いた社会学的研究がしばしば掲載される雑誌として、「伝記と社会学」部会が発行する*Life Stories / Récits de vie*の他にも、*Qualitative Sociology*、*The Journal of Contemporary Ethnography*などが刊行されている。

このような生活史を用いた社会学的研究の復権を唱えるとき、必ず言及されるのが、1918年から1920年にかけて出版されたトマスとズナニエツキによる『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』(以下、『ポーランド農民』)である [例えば、Plummer1983: 訳書3, 中野卓・桜井編1995: 7, 谷編1996: 4]。単なる例示として生活史が使われることは、人文・社会科学の歴史とともに古い。しかし、一定の理論的観点から生活史を利用し、理論とデータの統合を目指したのは『ポーランド農民』が最初であるといわれている [Allport1942: 訳書19]。『ポーランド農民』の研究スタイルは、1920年代から1930年代半ばにシカゴ大学で盛んに行なわれた調査研究のモデルとなり、その後のアメリカ社会学の流れに大きな影響を与えた [中野正大1997: 3-37]。実際、「アメリカ経験社会学における最初の偉大な古典」[Cosser1977: 381] や「社会心理学において五本の指に入る最も影響力の大きい作品」[Fleming1967: 325]、「それまでアメリカの研究がなし得なかった方法で理

論とデータを統合させようとしたという点で記念碑的な作品」[Bulmer1984：45]と高く評価されてきた。

『ポーランド農民』の出版以前、社会に関する理論構築とデータ収集は、別個に行なわれていた。理論構築を担ったのは、19世紀後半のアメリカにおける、ウォード、サムナー、ギディングス、ロスといった社会学者たちである。彼らは、まず、人間行動全体を説明する根本的で単純ないくつかの原理を主に思索をとおして見つけ出し [Faris1970：4=訳書24]、これらの原理をいわば社会学の公理とみなして社会と人間行動の理論を演繹的に体系化しようと試みた。一方、社会に関するデータの収集を推進していったのは、社会調査運動 (social survey movement) と呼ばれる社会改良主義の色彩の濃い一連の社会問題の調査である。これらの調査は、都市の住民たちを取りまく住宅・衛生・犯罪・貧困などの劣悪な環境を膨大な資料によって明らかにしていった [Faris1970：6-8=訳書27-29]。『ポーランド農民』の意義は、理論構築とデータ収集という二つの流れを統合して新しい社会の研究スタイルを確立した点にある。

このように、『ポーランド農民』は、社会学史の中で重要な位置を占めている。しかし、社会科学評価委員会の依頼によって『ポーランド農民』を検討したブルーマー [Blumer1979] の指摘を始めとして、『ポーランド農民』のもつ方法論的な不備がいわば「常識化」し、言及されることが多い割には、実際に紐解かれることの稀な作品となっている。これは、一定の理論的観点から生活史を用いた先駆的業績である『ポーランド農民』にとって不幸な状況といわねばならない。本稿では、特に、2000頁におよぶ『ポーランド農民』において約5分の1を占めるウラデクというポーランド青年の自伝を用いた研究を取り上げる。この部分では、伝統社会から近代社会へという変動期における一大衆のパーソナリティ形成が分析・総合される。以下、トマスとズナニエツキの議論を忠実に追うことによって、『ポーランド農民』における生活史法を検討していきたい。

1 生活史利用の方法論

『ポーランド農民』において生活史は、社会的パーソナリティ論という視角から研究される。この社会的パーソナリティ論は、「分析」(analysis)ではなく、「総合」(synthesis)と位置づけられる。トマスとズナニエツキは、次のように述べる。「法則定立的研究の理念が、社会の中で営まれている意識的な生活の全体を分析して要素的な諸事実に分け、これらの諸事実を一般法則に従属させることであるならば、社会的パーソナリティ論の理念は、個々の諸事実からすべての個人の進化の全過程を再構成することである。[ibid.：1836=訳書91]」。

これに対して、『ポーランド農民』の冒頭の「方法論ノート」では、「分析」が強調されている。トマスとズナニエツキの目指す社会理論は、分析に基づいて法則を導き出す法則定立的科学であるという。彼らは、社会的生成 (social becoming) と呼ばれる社会的な因果関係を解明するために、社会的生成を一つの原因と結果の組である事実 (fact) に分解し、これらの事実と事実の関係を体系化することを目指す [ibid.: 36=訳書34]。この事実に含まれているさらに小さな分析単位が、「価値」と「態度」である。よく知られているように、「価値」(value) は、社会の客観的要素であり、経験的内容と意味をもち、人々の活動の対象となるものである [ibid.: 21=訳書21]。一方、個人の主観的要素である「態度」(attitude) は、個人の意識過程を指し、社会的世界における個人の現実の活動もしくは可能な活動を決定する [ibid.: 22=訳書21-22]。そして、この「価値」と「態度」は、人々の行なう具体的な「活動」(activity) によって結びつけられる [ibid.: 22=訳書22]。個人が「活動」を行なう際に直面するのが「状況」である。「状況」(situation) とは、複数の価値と複数の態度が、何の関連性もないままに存在する混沌である。「活動」を行なうためには、この混沌とした「状況」に秩序を与えなければならない。これが、「状況の定義」(definition of situation) である。「状況の定義」とは、具体的な活動を行なうために、ある特定の「価値」とある特定の「態度」を結びつけて「活動」を一意的に決定する準備作業である。そして、この「状況の定義」に基づいて行なわれた具体的な活動を、「状況の解決」(solution of a situation) と呼ぶ [ibid.: 68=訳書63]。「価値」と「態度」という社会の客観的要素と個人の主観的要素から社会的生成の因果関係を明らかにしようとする『ポーランド農民』の方法論的公式は、次のようになる。「社会現象もしくは個人現象の原因は、けっして社会現象だけでも、個人現象だけでもない。常に社会現象と個人現象の組合せである。より正確な用語で言い換えると、価値の原因もしくは態度の原因は、けっして価値だけでも、態度だけでもない。常に態度と価値の組合せである。」(強調は原文) [ibid.: 44=訳書41]。

これとは逆に、「態度」と「価値」という要素からパーソナリティという全体を「総合」するのが、社会的パーソナリティ論である。「総合」の研究である社会的パーソナリティ論は二つの意義をもつ [ibid.: 1836=訳書91]。一つは、法則定立的な社会学の一般化を検証する補完的研究としての意義であり、もう一つは、固有の理論的・実践的関心としてパーソナリティの進化を明らかにする意義である。

トマスとズナニエツキの想定するパーソナリティは、ある安定した極限形態に向かって常に変化し続ける動態的な過程である。その極限に向かうパーソナリティ進化の経路こそが、社会心理学的総合の中心的な対象とされる [ibid.: 1837-1838=訳書92]。個々のパーソナリティの進化は各々独特であるけれども、「典型的な発生の系列」(typical lines of

genesis) を認めることができるという [ibid.: 1839=訳書93-94]。「発生の系列」とは、「態度—価値—態度」や「価値—態度—価値」のように、ある価値の影響のもとある種の態度がある別の態度から発達してきたり、ある態度によってある価値がある別の価値から発達してくる際の諸事実の連続を指す。「発生の系列」が類型性を帯びるメカニズムとして、一つ目に、パーソナリティ内部に安定した諸態度が蓄積されてくると、それらと適合しない影響力が受容されないようになる点と、二つ目に、社会が個人に対して一定の枠組を課す点が指摘されている [ibid.: 1841-1842=訳書95-96]。

トマスとズナニエツキによれば、パーソナリティは「気質」「性格」「生活組織」の三要素から構成されている。気質 (temperament) は、社会的影響とは独立した生得的な態度の集合を指し、本能的で生物的要求に対処する [ibid.: 1844=訳書98]。一方、性格 (character) は、本能的な気質を基盤に社会的影響を受けて発達し、意識的な反省によって体系化されている [ibid.: 1844=訳書98]。最後に、生活組織 (life-organization) とは、状況を定義するのに必要な一連の諸規則のことである [ibid.: 1852-1853=訳書104]。

パーソナリティにおける性格と生活組織の形成は、社会的現実に対応する必要性から説明される。トマスとズナニエツキは、自然的世界と社会的世界の二元論に立つ。両者を分かちのが「意味」(meaning) である。彼らによれば、人間は、環境を意味によって解釈している。主体が影響を受け適応している環境は、「その主体」の世界であって、科学の客観的世界ではない [ibid.: 1846-1847=訳書99-100]。このように主体によって見いだされた世界は、「経験」(experience) と呼ばれる。したがって、気質的態度しかもたない個人は、社会的パーソナリティではない。社会的パーソナリティになるためには、社会的な意味の観点から社会が個人に課す要求に対する適応の方法と、これらの社会的意味を個人的な目的のために制御する方法を学ばなければならない。個人に課せられた社会的要求を満たすために、諸態度の組織化が行なわれ、性格が生み出される [ibid.: 1850-1851=訳書102-103]。一方、社会的現実を制御する方法の発達は、一般的な状況の諸図式 (schemes) である生活組織を生み出す [ibid.: 1852-1853=訳書104]。以上をまとめると、社会的パーソナリティの発達には、次のような並列的・相互依存的な四つの過程が含まれている。「(1) 性格の決定。これは気質を基盤にして行なわれる。(2) 生活組織の構成。この生活組織は、性格に含まれている多様な態度が、多かれ少なかれ完全な客観的表現を可能にする。(3) パーソナリティに課せられる社会的な要求に対する性格の適応。(4) 社会的組織に対する個人の生活組織の適応。」[ibid.: 1863=訳書111-112]。

性格における諸態度の確定性の度合いと、それに対応する生活組織における図式化の度合いは、各パーソナリティごとに大きな相違がある。これらの程度によって、社会的パーソナリティは「フィリスティン」「ボヘミアン」「創造的個人」の三類型に区別できる [ibid.:

1853-1856=訳書104-106]。フィリスティン (Philistine) は、性格に柔軟性がなく、生活組織にも柔軟性のない類型である。性格における諸態度の組織がかなり固定化されているので、新しい態度が発達できない。フィリスティンの生活組織は、少数の狭い諸図式から構成されているため、個人の要求や関心は限定され、外部の条件が安定している場合にしか機能しない。次に、ボヘミアン (Bohemian) は、性格における諸態度の組織化がなく、生活組織に柔軟性のある類型である。諸態度の組織化のないボヘミアンの性格は、あらゆる影響力に対して開かれており、新しい態度の発達を排除しない。ボヘミアンの生活組織における図式の選択は、その時々々の観点に依存しているため、行動は一貫性をもたず、社会的現実に対する適応性も一時的なものに過ぎない。最後に、創造的個人 (creative individual) は、性格における諸態度の組織化があり、生活組織の柔軟性もある類型である。創造的個人の性格は、反省的な諸態度が生産的な活動計画に規制されながらも変化する傾向を含んでいるため、組織化されている一方で進化の可能性ももっている。創造的個人は、社会的価値が不変であるという仮定によってではなく、いくつかの明確な目的にしたがって修正・拡大する傾向に基づき自らの生活組織を築く。このため、新しい状況への適応性と関心の多様性は、活動の一貫性と両立することが可能である。

2 実際の生活史の利用

トマスとズナニエツキによる実際の生活史の分析・総合を検討する前に、まず『ポーランド農民』で使われた生活史の概要に触れておきたい。彼らが研究に用いた生活史は、アメリカに移民してきたウラデク・ヴィスニシエフスキ (Wlodek Wiszniewski) というポーランド人青年が書いた自伝である。自伝の記述から推定すると、彼がこの自伝を書き始めたのは1914年の11月末で、彼が30歳の時である (年表を参照)。したがって、彼は、1884年に、ポーランドの首都ワルシャワから西に200キロほど離れたカリシュ州のルボティンで生まれたことになる。農民出身の父は、ウラデクが小さかった頃、ルボティンで居酒屋を営んでいた。家は裕福であったが、次第に貧しくなっていく。ウラデクの兄弟は10人おり、ウラデクは上から5番目である。彼は、14歳の時、ギルド制度のもと、パン職人になるために徒弟奉公に入る。いくつか奉公先を変えながらも、一人前のパン職人になり、働き始める。しかし、勤めていたパン屋がつぶれたり、仕事のミスなどからパン屋を変えざる得なくなり、ポーランド各地を放浪する。パン職人としての仕事を見つけることは困難をきわめ、プロシアの農場へ季節労働に出かける。季節労働終了後、ウラデクは仕事を見つけることができず、冬のベルリンで寒さと飢えのため死ぬような思いをする。彼は、ポーランドに戻り、軍隊に入る。除隊後、巡査となり、自分のパン屋を建てるためにお金を貯め

ウラデクの年表

西暦	年齢	月	ページ	経歴	パーソン	出来事
1884	0		1915	幼少	基礎	カリシュ州ルボティン村で生まれる
1890	6		1918	幼少	基礎	学校へ行く
1892	8		1930	幼少	基礎	隣にD先生一家が引っ越してくる
1896	12		1936	幼少	基礎	ベラジアとの性的関係
1897	13		1937	幼少	基礎	実家がルボティンからソソボルノへ引越
1898	14		1937	徒弟	ボヘ	床屋へ徒弟奉公、外科医助手へ徒弟奉公
1899	15	3末 冬 クリ	1944	徒弟	ボヘ	ソソボルノのD氏のバン屋へ徒弟奉公
			1953	徒弟	ボヘ	結婚式を口実にD氏のバン屋から逃げる
			1958	徒弟	ボヘ	父がD氏の所に荷物を取りに行ってくれる
1900	16	1 夏 冬	1960	徒弟	ボヘ	トゥレックのW氏のバン屋へ徒弟奉公
			1961	徒弟	ボヘ	父がトゥレックに来て徒弟奉公の条件を話し合う
			1961	徒弟	ボヘ	ジョゼフがトゥレックのW氏のバン屋をやめる
1901	17	3	1962	徒弟	ボヘ	トゥレックのW氏のバン屋で大怪我をする
			1964	徒弟	ボヘ	イースターの休みに実家へ帰る
			1969	徒弟	ボヘ	ブルゼスクのM氏のバン屋へ徒弟奉公
		秋	1971	徒弟	ボヘ	M氏が親方でないことが判明
			1975	徒弟	ボヘ	実家へ帰る
			1975	徒弟	ボヘ	ソスノウィエックのK氏のバン屋へ徒弟奉公
1902	18	4 夏 冬	2008	職人	ボヘ	ドーラとの恋愛
			2011	職人	ボヘ	徒弟奉公の修了
			2013	職人	ボヘ	17歳の時、ドーラとの恋愛が終わった
			2013	職人	ボヘ	コロのユダヤ人のバン屋で12週間働く
			2013	職人	ボヘ	コロのK氏のバン屋へ移る(32週間働く)
1903	19	2	2015	職人	ボヘ	無様な格好で馬に乗る
			2015	職人	ボヘ	コロの親方K氏が病気になる
		3	2015	職人	ボヘ	コロの親方K氏が死ぬ
			2019	職人	ボヘ	コロを去る
			2026	職人	ボヘ	実家に戻る
		冬 クリ	2027	職人	ボヘ	ウーチへ行く(3ヶ月間仕事をせず)
			2028	職人	ボヘ	ウーチに戻る
2029	職人		ボヘ	ウーチでWerkmeisterの臨時の仕事をする		
1904	20	5	2030	職人	ボヘ	冬が近づく
			2030	職人	ボヘ	親類を訪ねる
		7	2034	職人	ボヘ	マニアの家で過ごす
			2045	職人	ボヘ	ウーチで働いていたバン屋が売却されてしまう
			2045	職人	ボヘ	ウーチから実家に戻る
		8	2046	職人	ボヘ	ウーチに戻る
			2046	職人	ボヘ	放浪の旅
			2046	職人	ボヘ	ウーチに戻り、バン屋で5週間臨時の仕事をする
			2048	職人	ボヘ	ワレックとワルシャワに向かう
			2052	職人	ボヘ	夏のリゾート地ジャプロナで8週間働く
11 クリ	2055	職人	ボヘ	ヴィルノへの放浪旅行(3週間)		
	2062	職人	ボヘ	コウノへの放浪旅行		
	2066	職人	ボヘ	グラジェオのバン屋で仕事		
	2066	職人	ボヘ	グラジェオのバン屋の徒弟ステファンの鼓膜を破り逃げる		
	2067	職人	ボヘ	実家に戻る		
1905	21	1	2071	職人	ボヘ	再び放浪する
			2073	職人	ボヘ	次兄スタッチの家に寄る
		3	2081	職人	ボヘ	クツノのK氏のワルシャワ・ペーカーリーで働く
			2083	職人	ボヘ	パーティ
		5	2086	職人	ボヘ	K氏がウラデクと結婚させようと妹を連れてくる
			2089	職人	ボヘ	日本とロシアの戦争が切迫する
			2093	職人	ボヘ	ワルシャワ・ペーカーリーを出ていく
			2094	職人	ボヘ	クロスニエウイスのバン屋で臨時の仕事をする
2096	職人	ボヘ	クロスニエウイスを去る			

ウラデクの年表（つづき）

1906	22	3 冬	2096	職人	ボヘ	次兄スタッツのいるストラズコフで過ごす
			2099	季節	ボヘ	プロシアへ季節労働へ行く
			2129	季節	ボヘ	ベルリンで死ぬ思いをする
			2129	季節	ボヘ	ベルリンで2ヶ月さまよい、所持金が底をつく
1907	23	1~2 3	2133	季節	ボヘ	ロシア領事館で紹介してもらった庭園で働く
			2134	季節	ボヘ	実家へ帰り、軍隊に入ることを非難される
			2135	軍隊	フィリ	軍隊へ行く
			2137	軍隊	フィリ	パン屋でアルバイトをする
1908	24	2 8 冬	2144	軍隊	フィリ	新しい新兵がやってきて、その教育係に任命される
			2150	軍隊	フィリ	クツノのK氏のワルシャワ・ペーカーで再び働く
			2152	軍隊	フィリ	クツノのK氏のワルシャワ・ペーカーをやめる
			2153	巡査	フィリ	巡査になる（1年2ヶ月働く）
1909	25	夏 10中 12初	2155	巡査	フィリ	夏が来る
			2163	巡査	フィリ	25歳との記述
			2165	巡査	フィリ	ヘレナ・Gに結婚を断られる
			2170	巡査	フィリ	両親と共同で店を開くために、店を探す
1910	26	1 クリ クリ	2171	両親	フィリ	サドルノに両親と共同で店を開く
			2177	両親	フィリ	サドルノで最初のクリスマス
			2182	両親	フィリ	ヘレナ・Pと婚約し、彼女の祖母に会いに行く
			2185	両親	フィリ	ヘレナ・Pと婚約破棄
1911	27	3 クリ	2188	両親	フィリ	バベフとスタッツがサドルノに来る
			2188	両親	フィリ	アメリカの姉マリアから手紙が来る
			2189	両親	フィリ	27歳との記述
			2192	両親	フィリ	スタシアとの結婚をあきらめる
1912	28	秋初	2194	両親	フィリ	サドルノで2度目のクリスマス
			2198	両親	フィリ	軍事教練に行く
			2202	両親	フィリ	マリアから再び手紙が届く
			2209	アメ	フィリ	アメリカに渡る
1914	29	10	2217	アメ	フィリ	ルドウィカとの結婚を勧められる
			2219	アメ	フィリ	ルドウィカをナイヤガラへ迎えに行く
			2220	アメ	フィリ	パン屋を解雇される
			2220	アメ	フィリ	ルドウィカとの結婚式
1914	30	1 1 3 11終	2221	アメ	フィリ	姉マリアの産後の病氣
			2223	アメ	フィリ	自伝を書き始める
			2223	アメ	フィリ	息子が生まれる
			2223	アメ	フィリ	息子の洗礼式
1915	3	1	アメ	フィリ	2223	息子の洗礼式
		3	アメ	フィリ	2225	新しいアパートへ引越

注

- (1)ウラデクの誕生日は夏頃と思われる
- (2)明確に年齢・西暦が記述されているが、前後の文脈から不適當であると判断した所が2箇所ある
2037頁「私の18年目の年が終わろうとしていた。」
2148頁「1906年は、とりわけ非常な喜びを覚える。なぜなら、後数日で軍隊を除隊するからだ。」

略語

幼少＝幼少時代
 徒弟＝徒弟奉公時代
 職人＝パン職人時代
 季節＝季節労働者時代
 軍隊＝軍隊時代
 巡査＝巡査時代
 両親＝両親との店時代
 アメ＝アメリカ時代

パーソ＝パーソナリティ
 基礎＝パーソナリティの基礎の確立期
 ボヘ＝ボヘミアン型パーソナリティ期
 フィリ＝フィリスティン型パーソナリティ期
 クリ＝クリスマス

る。ウラデクは、両親と共同で食料品店兼パン屋を建てるが、両親から受けた待遇の悪さからアメリカに行く決意をする。アメリカで彼は結婚し、子供も生まれようとしていた。しかし、彼はパン屋の仕事を失い、再び困窮する。彼の人生を仕事を中心にすると、「幼少時代」「徒弟奉公時代」「パン職人時代」「季節労働者時代」「軍隊時代」「巡査時代」「両親との店時代」「アメリカ時代」の8段階になる。これらを、彼のパーソナリティ進化と対応させると、幼少時代は「パーソナリティの基礎の確立期」、徒弟奉公時代とパン職人時代は「ポヘミアン型パーソナリティ期」、軍隊時代以下は「フィリスティン型パーソナリティ期」として理解できる。ウラデクは、このように波乱に富んだ自分の人生を、生き生きとした文体で描いている。彼の教育程度は小学校レベルで止まっており、ポーランド語とロシア語の読み書きと算術ができる程度だという。しかし、トマスとズナニエツキは、ウラデクの文学的才能を高く評価しており、違う道を歩めば優れた作家になったであろうと述べている [ibid. : 1913-1914=訳書151]。

自伝を書くことになった事情は、ウラデクが自伝の中で語っている [ibid. : 2222-2223]。ポーランドからアメリカへ移民してきた後、彼はパン屋に勤めるが、結婚の直前に解雇され、しばらくの間、妻の収入で暮らしていた。しかし、その妻が妊娠し仕事を辞めなければならなくなる。その時、ウラデクは、トマスとズナニエツキが出した新聞広告で、ポーランドから来た手紙を一通あたり10から15セントで買い取ってもらえることを知る。さっそく、彼は、家族からきた手紙を売りに行った。このとき、ズナニエツキと面識を得る。彼は、ズナニエツキに、お金がなくても妻を出産させてくれる病院を紹介して欲しいと手紙に書いた。ズナニエツキからの返信で、お金に困っているようならば報酬を出すから自伝を書いて欲しいとウラデクは依頼されたのである。200枚につき30ドルという約束であった。お金に困っていたウラデクは、休まずに自伝を書き続けた。彼はこの自伝を3ヶ月ほどで書き上げている [ibid. : 1912=訳書149]。

この自伝に対するトマスとズナニエツキの見方は、以下の通りである。まず、自伝の資料としての代表性であるが、彼らは、ウラデクを、あらゆる文明社会において人口の圧倒的多数を占めている文化的に受動的な大衆の典型的代表と位置づけている [ibid. : 1907=訳書146]。自伝を書いたウラデクの動機は、最初は金銭的報酬であったが、すぐに文学的関心と自分の人生に対する関心が主要な動機になったという [ibid. : 1912=訳書149]。そして、「自伝の誠実さは疑い得ない。」[ibid. : 1912=訳書150] と、ウラデクが意図的にうそをつくようなことはなかったと見ている。彼から買い取った手紙などが、その判断の根拠となっている [ibid. : 2226fn]。明確な記述はないが、この自伝はポーランド語で書かれ、ズナニエツキによって英語に翻訳されたものと考えられる。この自伝は312ページにわたって掲載されており、これは、実際にウラデクが書いた分量をおよそ半分にしたもの

である [ibid. : 1912=訳書149]。トマスとズナニエツキによって短縮された箇所は本文中では「[]」で示され、その部分の内容が要約されている [ibid. : 1912=訳書149-150]。加筆は、語句の説明など最小限に押さえられている。加筆の箇所も「[]」で示されている。したがって、この自伝は、ウラデク自身の表現を最大限に活かす形で収録されたといえよう。

ウラデク本人の記述を尊重する「自伝本文」に対して、トマスとズナニエツキが自分たちの議論を展開するのは「脚注」と「結論部」である。さらに、「脚注」と「結論部」の間で「分析」と「総合」というもう一つの役割分担を見ることができる [ibid. : 2227=訳書151]。脚注で、トマスとズナニエツキは、ウラデクのパーソナリティ進化を「態度」などの諸要素に分析していく。脚注は全部で234個あり、長さは、一行のものからページの半分を占めるものまで様々である。一方、この結論部で展開されるのは、脚注で指摘してきた諸要素を、再びパーソナリティという一つの全体に再構成する総合である。この結論部は、自伝本文に続いて18頁にわたって掲載されており、ウラデクが経済的なフィリスティン型のパーソナリティになるという発展過程がまとめられている。

2-1 パーソナリティの基礎の確立期

それでは、自伝の文脈に沿って、「脚注」による注釈を中心に、トマスとズナニエツキの「分析」を概観していく。

生まれ故郷の村で14歳まで過ごしたウラデクの幼少時代は、社会的本能 (social instinct) と家族という第一次集団によってパーソナリティの基礎が確立された時期と位置づけることができる。自伝本文に続く結論部で、ウラデクのパーソナリティ進化に最も重要な影響を与えた態度群として「社会的本能」が指摘される [ibid. : 2228=訳書153]。社会的本能とは、他者の反応を考慮に入れて自らの行動を決定して社会生活を営んでいくという人間に生まれながらに備わっている性質である。この社会的本能の具体的な現われが、「応答を求める欲求」(desire for response) と「認知を求める欲求」(desire for recognition) である。「応答を求める欲求」とは、他者を対象とする行為に対して肯定的でパーソナルな反応を直接的に得ようとする傾向のことである。一方、「認知を求める欲求」とは、その対象に関係なく行為の肯定的な評価を直接ないし間接的に得ようとする傾向のことである。 [ibid. : 1882-83=訳書126-127]

トマスとズナニエツキは、ウラデクの社会的本能に影響を与えた三つの社会的組織を指摘している [ibid. : 1925fn]。一つは、彼の家族である。それは、いくぶん専制的で家父長的な核家族だという。二つは、荘園の村における小さな諸集団と諸個人からなるヒエラルキーである。三つは、娯楽の場だけで出会うような緩やかな知り合いのサークルである。この他にも、隣に暮らすD先生家族や、教会の司祭が、ウラデクに影響を及ぼしていると

指摘される。このうち、とりわけ大きな影響を与えた家族の分析を見ていこう。

ウラデクの家族は、彼の社会的本能に対してネガティブな影響を与えた。ウラデクは、家族から人一倍愛されたいと思いつつながら、自分は愛されていないと感じている。彼は、クリスマスの時、自分は他の兄弟に比べて粗末なプレゼントしかもらえなかった。「兄は私より劣っているが、彼は両親にどうお世辞を言うかをいつも心得て」[ibid. : 1927] いるからだという。その一方で、ウラデクは、母親との甘美な思い出を語る。家族から十分な愛情を得ることのできなかつた彼は、ライ麦畑に穴を掘り、その中で一人空想するのが好きであったという。ときどき、母親が彼を探しに来てくれた。その時、ウラデクは、母親に膝枕をしてもらい、至福の時を味わう。そして、努力もせずに母親の愛情を得ている他の兄弟に、彼は嫉妬するのである [ibid. : 1930]。トマスとズナニエツキによれば、両親のこうした偏愛が、ウラデクの応答を求める欲求、すなわち社会的本能に作用し、後に「立身出世をしようとする傾向」を生み出すという [ibid. : 1927fn]。「徒弟奉公を無事に終え、立派なパン職人になり、自分のパン屋をもつ」ことがウラデクの目標となり、この目標から彼の諸態度が組織化されていく。そして、職を求めてポーランド各地を放浪しているときも、幼少時代に家族の影響力によって達成されたこの態度の組織化が、ウラデクの完全な解体を防ぐのである [ibid. : 2237=訳書161]。

2-2 ボヘミアン型パーソナリティ期

14歳の時、ウラデクは、徒弟奉公へ行くことになる。この徒弟奉公の時期には、一人前のパン職人になるという目標から性格と生活組織が形成され、同時に、後の放浪生活を特徴づける諸態度が発達する。

両親は、最初はウラデクの将来に無頓着であったけれども、ある時、家業を継がせようとする。しかし、彼は、それに耳を貸さない。ウラデクが家族のもとを離れて、徒弟奉公に行こうとする要因として、「新しい経験を求める欲求」(desire for new experience) が指摘されている [ibid. : 1944fn]。両親の意向を無視してパン屋へ徒弟奉公に行こうとしたため、ウラデクは、最愛の母親に平手打ちされる。徒弟先への道中、彼は泣き続けた。そして、「どんなにつらかろうとも、徒弟奉公に最後まで耐え、後にはパン屋を建てよう。そうすれば、今、私が、両親の目から見て、子供たちの中で最も悪い子供であったとしても、年老いたとき両親は私と一緒に暮らすことができる。」[ibid. : 1946] と決意する。この決心は、「応答を求める欲求」と「認知を求める欲求」に基づいたものだという [ibid. : 1946fn]。

パン職人になるまでの修行生活は、つらいものであった。新入りに課せられる仕事は厳しい上に、先輩の徒弟たちにいじめられる。この時期、ギルド制度は衰退期にあり、親方

である [ibid. : 1912=訳書149]。トマスとズナニエツキによって短縮された箇所は本文中では「[]」で示され、その部分の内容が要約されている [ibid. : 1912=訳書149-150]。加筆は、語句の説明など最小限に押さえられている。加筆の箇所も「[]」で示されている。したがって、この自伝は、ウラデク自身の表現を最大限に活かす形で収録されたといえよう。

ウラデク本人の記述を尊重する「自伝本文」に対して、トマスとズナニエツキが自分たちの議論を展開するのは「脚注」と「結論部」である。さらに、「脚注」と「結論部」の間で「分析」と「総合」というもう一つの役割分担を見ることができる [ibid. : 2227=訳書151]。脚注で、トマスとズナニエツキは、ウラデクのパーソナリティ進化を「態度」などの諸要素に分析していく。脚注は全部で234個あり、長さは、一行のものからページの半分を占めるものまで様々である。一方、この結論部で展開されるのは、脚注で指摘してきた諸要素を、再びパーソナリティという一つの全体に再構成する総合である。この結論部は、自伝本文に続いて18頁にわたって掲載されており、ウラデクが経済的なフィリスティン型のパーソナリティになるという発展過程がまとめられている。

2-1 パーソナリティの基礎の確立期

それでは、自伝の文脈に沿って、「脚注」による注釈を中心に、トマスとズナニエツキの「分析」を概観していく。

生まれ故郷の村で14歳まで過ごしたウラデクの幼少時代は、社会的本能 (social instinct) と家族という第一次集団によってパーソナリティの基礎が確立された時期と位置づけることができる。自伝本文に続く結論部で、ウラデクのパーソナリティ進化に最も重要な影響を与えた態度群として「社会的本能」が指摘される [ibid. : 2228=訳書153]。社会的本能とは、他者の反応を考慮に入れて自らの行動を決定して社会生活を営んでいくという人間に生まれながらに備わっている性質である。この社会的本能の具体的な現われが、「応答を求める欲求」(desire for response) と「認知を求める欲求」(desire for recognition) である。「応答を求める欲求」とは、他者を対象とする行為に対して肯定的でパーソナルな反応を直接的に得ようとする傾向のことである。一方、「認知を求める欲求」とは、その対象に関係なく行為の肯定的な評価を直接ないし間接的に得ようとする傾向のことである。 [ibid. : 1882-83=訳書126-127]

トマスとズナニエツキは、ウラデクの社会的本能に影響を与えた三つの社会的組織を指摘している [ibid. : 1925fn]。一つは、彼の家族である。それは、いくぶん専制的で家父長的な核家族だという。二つは、荘園の村における小さな諸集団と諸個人からなるヒエラルキーである。三つは、娯楽の場だけで出会うような緩やかな知り合いのサークルである。この他にも、隣に暮らすD先生家族や、教会の司祭が、ウラデクに影響を及ぼしていると

指摘される。このうち、とりわけ大きな影響を与えた家族の分析を見ていこう。

ウラデクの家族は、彼の社会的本能に対してネガティブな影響を与えた。ウラデクは、家族から人一倍愛されたいと思いつつながら、自分は愛されていないと感じている。彼は、クリスマスの時、自分は他の兄弟に比べて粗末なプレゼントしかもらえなかった。「兄は私より劣っているが、彼は両親にどうお世辞を言うかをいつも心得て」[ibid. : 1927] いるからだという。その一方で、ウラデクは、母親との甘美な思い出を語る。家族から十分な愛情を得ることのできなかつた彼は、ライ麦畑に穴を掘り、その中で一人空想するのが好きであったという。ときどき、母親が彼を探しに来てくれた。その時、ウラデクは、母親に膝枕をしてもらい、至福の時を味わう。そして、努力もせずに母親の愛情を得ている他の兄弟に、彼は嫉妬するのである [ibid. : 1930]。トマスとズナニエツキによれば、両親のこうした偏愛が、ウラデクの応答を求める欲求、すなわち社会的本能に作用し、後に「立身出世をしようとする傾向」を生み出すという [ibid. : 1927fn]。「徒弟奉公を無事に終え、立派なパン職人になり、自分のパン屋をもつ」ことがウラデクの目標となり、この目標から彼の諸態度が組織化されていく。そして、職を求めてポーランド各地を放浪しているときも、幼少時代に家族の影響力によって達成されたこの態度の組織化が、ウラデクの完全な解体を防ぐのである [ibid. : 2237=訳書161]。

2-2 ボヘミアン型パーソナリティ期

14歳の時、ウラデクは、徒弟奉公へ行くことになる。この徒弟奉公の時期には、一人前のパン職人になるという目標から性格と生活組織が形成され、同時に、後の放浪生活を特徴づける諸態度が発達する。

両親は、最初はウラデクの将来に無頓着であったけれども、ある時、家業を継がせようとする。しかし、彼は、それに耳を貸さない。ウラデクが家族のもとを離れて、徒弟奉公に行こうとする要因として、「新しい経験を求める欲求」(desire for new experience) が指摘されている [ibid. : 1944fn]。両親の意向を無視してパン屋へ徒弟奉公に行こうとしたため、ウラデクは、最愛の母親に平手打ちされる。徒弟先への道中、彼は泣き続けた。そして、「どんなにつらかろうとも、徒弟奉公に最後まで耐え、後にはパン屋を建てよう。そうすれば、今、私が、両親の目から見て、子供たちの中で最も悪い子供であったとしても、年老いたとき両親は私と一緒に暮らすことができる。」[ibid. : 1946] と決意する。この決心は、「応答を求める欲求」と「認知を求める欲求」に基づいたものだという [ibid. : 1946fn]。

パン職人になるまでの修行生活は、つらいものであった。新入りに課せられる仕事は厳しい上に、先輩の徒弟たちにいじめられる。この時期、ギルド制度は衰退期にあり、親方

が徒弟の福利を心配するようなこともない [ibid. : 1951-1952fn]。ウラデクは何度か徒弟奉公先を変え、実家と徒弟奉公先を往復する。時には、実家に帰りづらく、知り合いのところを転々とすることもあった。トマスとズナニエツキは、彼の中に、外的な要因の影響力によって「放浪的態度」に変わる「変化しようとする先在的性癖」と「冒険を求める欲求」が存在していることを指摘する [ibid. : 1954fn]。奉公先を次々と変えていたウラデクは、自信を喪失していた。だが、彼は、姉マリアの名付け親が、すでに何人かの徒弟を一人前にしたことを思い出し、そこで徒弟奉公を終える決意をする。「ボヘミアンの性質」と「安定した生活組織を求める欲求」の葛藤によって生活の指針に一貫性のないウラデクであるが、これ以後、徒弟奉公を終了するという理想から、彼の生活は組織化される [ibid. : 1972fn]。

最後の徒弟奉公先であるソスノウイエックでは、ウラデクの生活態度が一変する。大きな工場主の娘ドーラとの恋愛がその原因である。ドーラに会う以前、彼は、男の友達と飲みに行ったり、ピリヤードに出かけたりしていた。服にも無頓着だった。彼女と知り合った後は、ドーラに内緒で酒場に行くことは、はばかれたし、服装にも気を配るようになった。パンを作る仕事さえ、うまくいくようになる。トマスとズナニエツキも、「ドーラとその両親の影響の下、ソスノウイエックにウラデクが滞在したことは、おそらく、安定した生活組織への最も近い接近法を特徴づける。」[ibid. : 1992fn] と位置づけている。ドーラとの逢瀬を重ね、徒弟奉公の修了証も獲得し、ソスノウイエックの生活は、ウラデクにとって満足いくものであったはずだ。しかし、彼は、ソスノウイエックを去ろうとする。この状況の定義は、彼の生来の「変化を求める傾向」と、職人は流浪すべきだという伝統と、読書と親方の息子によるワルシャワの話の三つの影響を受けている [ibid. : 1998fn]。こうして、ウラデクは、他の農民階級の人々と同様に、「恋愛への関心」より「経歴への関心」を優先させる。だが、その一方で、彼の「仕事への態度」は、「放浪の傾向」と結びついているために、生活組織の基礎になることができない [ibid. : 2001fn]。

ウラデクは、一人前のパン職人になってからも、放浪と定住を繰り返す。行動の基準を完全に社会に依存するという典型的な農民の態度をもつウラデクは、衰退中のギルドに明確な社会的枠組を見いだすことができなかった。ウラデクは、「安定を求める欲求」(desire for stability) と「新しい経験を求める欲求」の周期性にしたがって、放浪と定住を繰り返していく [ibid. : 2010-2011fn]。

ソスノウイエックを発ったウラデクは、コロという町に到着する。この町では、悪い仲間との交際が再開し、かつての生活に逆戻りする。パン屋の仲間と酒場へ行くようになり、ウォッカの味をおぼえた。彼の生活が一変したのは、環境の変化によってそれまでに獲得された生活組織が一気に捨てられてしまったからである [ibid. : 2010-2011fn, cf.2013fn]。

生活組織は、客観的には社会的環境に根拠をもち、主観的には社会的本能に基礎をもつ。強力な社会的本能をもつウラデクは、社会が示す手本に簡単に従ってしまう。このため、既存の生活組織と一致しない諸図式が社会によって課されると、彼は、「フィリスティンの生活組織」もしくは「ボヘミアンの分解」へと進んでいく。ウラデクの意識にとって生活組織は一つの全体であり、その一部を拒絶することは全体を否定することに等しいからである。

勤めていたパン屋の親方が亡くなるなどして、ウラデクは、仕事探しの放浪をせざるを得なくなる。ワルシャワへ向かう途中、ウラデクは、ワレックという男と道連れになった。ワレックは、放浪生活を日常化し、楽しんでさえいる。それに対し、ウラデクは、定住してまともな仕事に就くことを望み、放浪生活に不満を感じている。二人が好対照をなす理由は、ワレックが最初から生活組織の欠如したパーソナリティであるのに対して、ウラデクは、いったん作り上げられた生活組織が二次的に解体したパーソナリティであるからだという [ibid. : 2047fn]。当初から生活組織の欠如したワレックは、外部の基準によって自分の生活を評価しないので、自分の現状に比較的満足している。それに対し、幼い頃の家族の影響力やソスノウィエックでの生活によって高い水準の生活を組織化していたウラデクは、かつての生活に対応する考えと習慣を捨てないかぎり、不満を感じる。

ワルシャワにも仕事はない。ウラデクは放浪を続ける。ある時、彼は、先生をしている次兄スタッチの家に立ち寄る。スタッチが町の中心的人物であることに、ウラデクは強く嫉妬する。スタッチと同じように人々から尊敬を勝ち得るために、彼は、仕事をしてお金を貯め、自分のパン屋を始めようという決意を新たにするのである。トマスとズナニエツキは、この時を「おそらく、これは、自分のパン屋をもつという考えが、明確な実際的な目標として確立した瞬間」[ibid. : 2078fn] と評している。ウラデクは、社会的な規制に同調すれば、強固な地位が個人に保証されることを理解しており [ibid. : 2078fn]、人々の認知を得るために放浪から定住へと好みを変えていく。

しかし、目標達成への道のりは険しい。ポーランドで、パン屋の仕事を得ることは難しかった。ウラデクは、当時、急速な経済成長を遂げつつあったプロシアへ向かう。農場での季節労働は、つらいものだった。3月の冷たい雨の中、彼は仕事の最中に倒れてしまう。この時期のウラデクを支えていたのは、同じ農場で働く人々からの社会的認知であった [2107fn]。ウラデクは、読み書きのできない彼らのために、手紙を書いてやったり、農場の若者たちに教育的な話をしてやったりした。家族と故郷から離れ、慣れない仕事で、女性への関心ももたず、経歴上昇の可能性もまったくないけれども、自分の優秀さを認知してもらった満足感は、すべてを相殺するのに十分であった。

農場での季節労働のシーズンが終わり、ウラデクはベルリンにやってきた。すぐに仕事

が見つかるだろうという予測は見事にはずれ、仕事はまったくない。ベルリンに到着して二ヶ月が経ち、所持金も底をついた。ウラデクは真冬の街をさまよう。その時、彼は兵隊の小隊に出会い、軍隊に入る決意をする。そうすれば、放浪・飢え・寒さから解放されるからだ。ポーランドへ戻るために、ウラデクはベルリンの領事館を訪ねた。

2-3 フィリスティン型パーソナリティ期

ウラデクは、社会が個人に課す規制を徐々に受け入れるようになり、安定を志向する。彼のパーソナリティは、ボヘミアンからフィリスティンへと移行していく。トマスとズナニエツキによれば、その原因は二つある [ibid. : 2243-2244 = 訳書167-168]。一つは、新しい経験を求める欲求の枯渇である。ウラデクの階級の人間が接近できる新しい経験は限られているため、一定期間の後、出会う経験は新鮮さを失う。もう一つの原因は、放浪生活における数え切れない不快な経験である。

フィリスティン化の徴候の一つとして、ウラデクが軍隊に入ったことがあげられよう。当時ポーランドはロシア領だったので、彼が入隊したのは、ロシアの軍隊である。この時期、民族的自由を求める運動がポーランドで盛んであり [ibid. : 2134fn]、軍隊に入るとは、人々から軽蔑されることであった。現に、ウラデクは、軍隊に入ることを家族に告げるとき、家族の猛反対に会う。しかし、「もしモスクワの連中が私を軍隊に取ってくれば、それはいいことだ。私は、すでに生計を得ることに疲れているからさ。世界中を放浪するのをやめるために、私は喜んで軍隊に行くつもりだ。』[ibid. : 2134] と意に介さない。

軍隊を除隊した後に就いた巡査の職も、同様に、ロシアによるポーランド支配の先兵とみなされていた。これも、ウラデクが社会に望むものが低下した証拠だろう [ibid. : 2155fn]。人々からの認知を強く期待するウラデクが、認知よりも生活の安定を優先させている。このように軽蔑される職であるにもかかわらず、彼は巡査をまじめに勤め、自分のパン屋を開くために、生活費を切り詰め、副業に精を出すのである。

今一つウラデクのフィリスティン化を示す徴候として、トマスとズナニエツキは、彼の結婚に対する考え方の変化をあげている [ibid. : 2150fn]。ウラデクは、結婚の際に、妻側が用意する持参金を自分のパン屋を開く資金にしようとする。彼は、軍隊を除隊後、かつて勤めていたクツノのワルシャワ・ベーカリーというパン屋に再就職する。4年前に勤めていたときには、結婚はまったく彼の考慮の外だった [ibid. : 2091]。それに対して、軍隊を除隊後は、結婚すれば金が手に入ると考えて、親方の上の娘にプロポーズする [ibid. : 2150]。この他にも、ウラデクは、結婚持参金を目当てに、数人の女性との結婚をもくろむ。

自分のパン屋をもつというウラデクの目標は、両親と共同で食料品店兼パン屋を建てる

という形で実現する。両親の面倒を見ているということで、彼に対する兄弟たちの評価は上がった。しかし、ウラデクは不満をつのらせる。父親が自分一人で店の経営を行ない、パン屋がウラデクの所有物であることを認めないからである。しかも、職人として彼に給料が払われることもない。ウラデクは、この店を開店するための準備に相当努力し、蓄えていたお金もすべて使い果たしていた。もはや、独力で自分のパン屋をもつことは不可能だ。このようなウラデクと両親の対立は、農民家族という衰微しつつある第一次集団における世代のギャップとして理解できよう [ibid. : 2173fn, 2180fn]。古い世代に属する両親は、家族の財産である店の仕事に給料を払う必要はないと考えている。それに対して、新しい世代のウラデクは、仕事に見合った金銭的報酬を要求するのである。

一つの転機が彼に訪れる。アメリカにいる姉マリアから手紙が送られてきた。ウラデクは、かつての「放浪の傾向」を復活させ [ibid. : 2202fn]、アメリカへ行く決心をする。弟のパベフがアメリカ行きに反対するが、自分のパン屋をもつ夢を断たれた彼は、ポーランドの生活に、もはや未練はない。

しかし、アメリカでの新しい生活も厳しいものであった。慣れないアメリカでの職探しは難航する。だが、ようやくパン屋の仕事も見つかり、ウラデクは結婚をする。1914年1月28日、彼が29歳のときである。彼はポーランドにいた頃とはうってかわって持参金の有無を問題にしていないが、それは「彼が達成した成熟さは、社会組織に同調しようとする傾向によって、結婚を必要とした。」[ibid. : 2218fn] ためである。結婚したものの、パン屋を解雇されたウラデクの経済状況はどん底であった。彼は、金銭的報酬の約束のもと、この自伝を書き始めたのである。

2-4 ウラデクのパーソナリティの総合

以下、トマスとズナニエツキによって「結論部」で展開されたウラデクのパーソナリティ進化の「総合」を見ていこう。

彼らの結論は、ウラデクのパーソナリティが、ボヘミアンとフィリスティンの間を往復しながら [ibid. : 2240=訳書163]、経済的なタイプのフィリスティンに向かう [ibid. : 2241=訳書166] というものである。彼らは、まず、ウラデクの気質的態度が正常であることを確認する。ウラデクは、生物学的には、「フィリスティン」「ボヘミアン」「創造的個人」のいずれのパーソナリティにもなり得た。したがって、彼がある種のパーソナリティ類型に向かうのは、社会的な要因によるものである。[ibid. : 2227-2228=訳書151-153]

ウラデクのパーソナリティ進化を特徴づけてきた態度群は社会的本能、すなわち、応答と認知を求める欲求である [ibid. : 2228=訳書153]。ウラデクの強力な社会的本能は、経済的・知的・道徳的・性的関心などすべての関心を従属させている [ibid. : 2234=訳書

158]。こうした最も基本的な諸傾向において、ウラデクは、第一次集団の典型的な成員である [ibid.:2236=訳書160]。彼は、自分自身の力でパーソナリティを組織化することができず、社会環境の継続的な助力を必要としている。なぜなら、自分の社会的本能のため、ウラデクは、状況の定義と生活組織の図式を構成するのに他者の見本や基準に頼らねばならないからである。

このようなウラデクの社会的本能に働きかけ、彼のパーソナリティ形成に最も大きな影響を与えたのが、家族という第一次集団であった。放浪生活において、ウラデクの完全な解体を防いでいるのは、家族による初期の組織化である [ibid.:2237=訳書161]。しかし、その後は、衰退中のギルドという恵まれない環境にあったために、個人的な理想を発達させていない [ibid.:2238=訳書161-162]。

ウラデクは、「完全な同調主義者タイプのフィリスティン」や「創造的個人」になる可能性もあった。だが、そうならなかったのは、そのようなパーソナリティ進化に適した社会環境に彼が一時的にしか接触しなかったためである [ibid.:2238-2239=訳書162-163]。ウラデクの暮らした社会環境は、パーソナリティ形成を方向付ける強力で一貫した枠組に欠けている。自らの力でパーソナリティを組織化できない人々は、明確な枠組のない社会において、容易にボヘミアンとなる [ibid.:2241-2242=訳書166]。同時に、明確な枠組をもたない社会は、同調を難しくするほど強力な要求を個人に課すこともないので、個人がフィリスティンになることもまた容易である [ibid.:2243=訳書167]。したがって、自伝の後半、ウラデクが、ボヘミアンからフィリスティンへと進化した原因を社会環境に帰すことはできない。その原因は、彼の態度に求めなければならない。新しい経験を求める欲求が枯渇し、「安全を求める欲求」(desire for security) が台頭してきたことによって、その変化がもたらされたのである [ibid.:2243=訳書167]。

以上の議論を見れば、ウラデクのパーソナリティ進化の説明が「価値」(社会環境)と「態度」(ウラデクの欲求)の図式による「総合」になっていることが分かるであろう。「パーソナリティの基礎の確立期」では、家族という社会環境を基準にして応答と認知を求める欲求が彼のパーソナリティの基礎を形成した。「ボヘミアン型パーソナリティ期」では、衰退中のギルドが明確な社会的枠組を与えることができなかつたので、新しい経験を求める欲求に基づいてボヘミアン型パーソナリティが発達している。そして、「フィリスティン型パーソナリティ期」では、同様に明確な枠組のない社会環境のもと、安全を求める欲求の成長にしたがって、彼は、社会の規制を受け入れるフィリスティンとなるのである。

おわりに

これまで『ポーランド農民』における生活史法を、ウラデクの自伝を取り上げて紹介してきた。社会的パーソナリティ論の観点から生活史が分析・総合され、見事に理論とデータが統合されている一端を示すことができたかと思う。しかし、理論とデータの統合はあくまで手段に過ぎず、彼らの最終的な目標ではない。最後に、社会的パーソナリティ論と生活史を組み合わせることによって彼らが提示しようとした主題を指摘しておきたい。

トマスとズナニエツキの主題は、「伝統社会から近代社会への変動期における個人のパーソナリティ形成」と要約できよう。彼らの研究は、「伝統的な社会的価値の体系が崩壊し、未だ新しい価値体系が確立されていない状態において、社会に完全に依存するという伝統的態度を保持している個人は、どのようなパーソナリティ進化をたどるのか」という問題関心に貫かれている。そして、彼らは、ウラデクを大衆の典型としてみなして [ibid.: 1907=訳書146]、彼の事例から一般的な人々のパーソナリティ形成を引き出そうとしているのである。

ウラデクが生きた時代は、かつての社会の諸形態が急速に崩壊し、それらに代わる新しい諸形態が依然として確立していない変動の時代である [ibid.: 2242=訳書166]。そして、すべての社会形態が「放浪性」(vagabondage) に向かうという流動的な社会である [ibid.: 1904=訳書143]。トマスとズナニエツキは、『ポーランド農民』の中で「集団の個々のメンバーに対する既存の社会的行動規則の影響力の減少」[ibid.: 1128]と定義される「社会解体」(social disorganization) という概念を提起するが、この時期がまさに社会解体の時期にあたる。伝統的な集団の影響力から離れた個人が析出され、個人主義が生まれる。この社会解体の状態における様々な社会現象が『ポーランド農民』の研究対象であり、その一つにウラデクの自伝を用いた個人のパーソナリティ形成の研究を位置づけることができる。

ウラデクの初期のパーソナリティ形成は、第一次集団と社会的本能による伝統的な方法に基づいて行なわれている。だが、この伝統的方法を支えていた諸条件が変質してしまっていた。農民社会では、応答と認知を求める欲求と第一次集団によるパーソナリティの形成は、社会と個人の間にかなる矛盾も生じさせない [ibid.: 1881-1882=訳書126]。個人の利害関心のすべては、社会の利害関心に従属しており、個人と社会は調和する。しかし、衰退しつつあったウラデクの家族は、応答を求める彼の欲求に完全に応えてくれるわけではない。ウラデクの家族に対する態度は、恨みといくらかの愛情と、家族の成功に対するむなしさの合成物である [ibid.: 1927fn]。彼のパーソナリティは、ねたみを基盤にネガティブな形で組織化されていく。

近代的社会になると、こうした伝統的なパーソナリティの形成は稀になっていく。第一

次集団の外部の世界と接触が増えるにつれて、経済的・宗教的・知的態度からパーソナリティが形成されるようになる [ibid. : 1885=訳書128-129]。これに対応して、伝統的な価値の複合体も、独立したいくつかの複合体へと下位分化し、個人は、これらの価値の複合体すべてを受容することを期待されなくなる [ibid. : 1894-1895=訳書136]。これらの価値の複合体を体現しているものが、目的を限定した専門化された個別集団である。近代社会においては、個人は複数の個別集団に所属しており、その集団の価値体系とそれに対応する態度の両者からパーソナリティ形成が行なわれるようになる。しかし、ウラデクは、こうした変化しつつあった社会の条件に適応することができなかった。あらゆる関心が社会的本能に従属しているウラデクは、ギルドに代わる個別集団を見つけ出すことができなかったのである。

ウラデクが最終的に達成したフィリスティンというパーソナリティは、変動の時代に適していない。フィリスティンの性格はかなり固定されているため、急激な条件の変化は、一気に彼の性格を破壊してしまう [ibid. : 1853=訳書104-105]。また、生活組織に含まれる図式の数が少ないために、まったく新しい状況に出会うと、フィリスティンは、完全な混沌状態に陥ってしまい、彼に示されるいかなる定義も受け入れてしまう [ibid. : 1855=訳書106]。ウラデクに大衆の典型を見ていたトマスとズナニエツキは、フィリスティン型パーソナリティが大量に出現した社会の現状を、おそらく、危機として認識していただろう。新しい状況に適応できない個人は多くの社会問題を引き起こす。新しい状況を定義できない個人は、支配者によって示された状況の定義を何でも受け入れ、容易に操作される。

こうしたフィリスティンに対して、彼らが期待をするのは、自分の能力によって自らを組織化する創造的個人のパーソナリティである。生活組織の形成には、以下の二通りがある [ibid. : 1871=訳書118]。一つは、出来合いの社会的諸図式が外部から個人へ与えられる方法であり、その代表は教育である。もう一つは、個人が自らの力で状況を定義し、それらをフィードバックさせることによって諸図式を形成する方法である。この第二の方法によって主に生活組織を形成できる個人は、創造的個人のパーソナリティを発達させることができる。変化しつつ構成していくというこの創造的個人は、新しい状況への適応性と関心の多様性と活動の一貫性を両立させることが可能である。

だが、「ポーランド農民」が執筆された当時、フィリスティンが多数派であり、創造的個人になることができるものは少数であった。その一因として、16歳から25歳までに個人の態度が十分に安定するという静的なパーソナリティを前提とする教育学と倫理学の方法が挙げられている [ibid. : 1890=訳書133]。トマスとズナニエツキの最終的な目標は、そうした従来の方法に代わって、社会心理学の方法を駆使して新しい社会にふさわしいパーソナリティ形成の方法を見いだすことである。「未来の社会の課題は、自発的なパーソナリ

ティの発達を阻害する障害物を除去するだけでなく、積極的な助力を与え、自発的なパーソナリティ発達のための適切な方法をあらゆる個人に供給し、静的な性格や同調主義者ではなく、動的で継続的に成長して創造的なパーソナリティにどのようなようになるかを教えることであろう。そして、そのような方法は、個々人を社会心理学的に研究することによってのみ見いだすことができるのである。』[ibid.: 1906-1907=訳書145]。

参考文献

- Allport, Gordon W. 1942. *The Use of Personal Documents in Psychological Science*. Social Science Research Council. (大場安則訳 1970『心理学における個人的記録の利用法』培風館)
- Bertaux, Daniel (ed.) 1981. *Biography and Society: The Life History Approach in the Social Sciences*. Sage.
- Blumer, Herbert. [1939]1979. *Critiques of Research in the Social Sciences: An Appraisal of Thomas and Znaniecki's The Polish Peasant in Europe and America*. Transaction Books. (桜井厚部分訳 1983『生活史の社会学』御茶の水書房)
- Bulmer, Martin. 1984. *The Chicago School of Sociology: Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research*. University of Chicago Press.
- Coser, Lewis. 1977. *Masters of Sociological Thought*. Harcourt Brace Jovanovich.
- Denzin, Norman K. 1989. *Interpretive Biography*. Sage.
- Faris, Robert E. L. [1967]1970. *Chicago Sociology, 1920-1932*. University of Chicago Press. (奥田道大・広田康生訳 1990『シカゴ・ソシオロジー 1920-1932』ハーベスト社)
- Fleming, Donald. 1967. "Attitude: The History of a Concept in America." *Perspectives in American History* 1.
- 藤澤三佳 1997「社会と個人——その解体と組織化——W・I・トマス、F・ズナニエツキ『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』宝月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究——初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣
- 宝月誠 1990「逸脱者のキャリア分析——『ジャック・ローラー』の解釈の試み」『逸脱論の研究——レイベリング論から社会的相互作用論へ』恒星社厚生閣
- 水野節夫 1979「初期トーマスの基本的視座——『ポーランド農民』論ノート(1)」『社会労働研究』25巻3、4号
- 水野節夫 1979「『ポーランド農民』の実質的検討に向けて——『ポーランド農民』論ノート(2)」『社会労働研究』26巻2号
- 水野節夫 1986「生活史研究とその多様な展開」青井和夫監修・宮島喬編集『社会学の歴史的展開』サイエンス社
- 中野正大 1997「社会調査からみた初期シカゴ学派」宝月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究——初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣
- 中野卓・桜井厚編 1995『ライフヒストリーの社会学』弘文堂
- Park, Robert E. 1931. "The Sociological Methods of William Graham Sumner and of William I. Thomas and Florian Znaniecki." Rice, Stuart A. (ed.) *Methods in Social Science: A Case Book*. University of Chicago Press. (好井裕明訳 1986「ウィリアム・グラハム・サムナー、ウィリアム・I・トマス、フローリアン・ズナニエツキーの社会学的方法」町村敬 Kyoto Journal of Sociology V/December. 1997

- 志・好井裕明編訳『実験室としての都市——パーク社会学論文選』御茶の水書房)
- Plummer, Ken. 1983. *Documents of Life*. George Allen & Unwin. (原田勝弘・川合隆男・下田平裕身監訳 1991『生活記録の社会学——方法としての生活史研究案内』光生館)
- 佐々木徹郎 1952「ウィリアム・タマスの社会学の進展」『社会学評論』8号
- 佐藤郁哉 1991「主体と構造——トマスおよびズナニエツキの「状況の定義」論をめぐって」『社会学評論』41巻
- 谷富夫編 1996『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社
- Thomas, William I. and Florian Znaniecki. [1918-1920]1974. *The Polish Peasant in Europe and America*. Octagon Books. (桜井厚部分訳 1983『生活史の社会学』御茶の水書房)

(たかやま りゅうたろう・博士後期課程)

to their ancient ties and pre-modern sentiments. It is true that nations are the products of modernization, but modernists fail to explain why many people believe in the continuity from pre-modern ethnic solidarities to modern nations.

Perennialist as represented by A. D. Smith suggests that there are ethnic roots called 'ethnies', the term coined by Smith. 'Ethnies' determine, to some degree, nature and frames of modern nations. It goes without saying that as the strategy of nation-building, it is the national history and culture that the intelligentsia and elites utilized, as the modernists pointed out. But in order to attain their goals, they had to mobilize the basis of pre-existing collective identities which bring about people's strong attachment. The perennialists concentrate their attention on the pre-existing conditions, which determine both goals and means for each nation in the manipulation of modern nationalists.

The modernist approach can't explain sufficiently why ethnic conflicts broke out frequently in many part of the world after the cold war. Thus, as the perennialists tried to show the reasons for these ethnic conflicts, we came to pay attention to genealogies of modern nations.

It is not until we use these two approaches that we could understand more deeply the complex and controversial problems of nations and nationalism.

The Formation of Wlodek Wiszniewski's Personality Against the Background of Polish and American Society in the Early-Twentieth Century: Life History Method in *The Polish Peasant*

Ryutaro TAKAYAMA

Since the latter half of 1970s, many sociologists have again begun to become interested in life history material. However, the first development of the life history method began in 1920s at Chicago University. W. I. Thomas and F. Znaniecki's *The Polish Peasant in Europe and America*, published in 1918-1920, is the first study that critically uses life history in terms of a theoretical framework. In this paper, I shall review the method of using a life history in *The Polish Peasant*.

The theory of social personality is the standpoint when using life history. The task of the theory is to synthesize the entire process of personal evolution from elementary causal facts. Thomas and Znaniecki regard personality as a dynamic process which consists of temperament, character and life-organization. Based on the definiteness of character and life-organization, three types of personality are constructed, namely, Philistine, Bohemian and the creative individual.

The life history used in *The Polish Peasant* is the autobiography written by Wladek Wiszniewski, a Polish immigrant during the early part of the 20th century. We can recognize three stages in his life. The first stage is the period of establishing the basis of his personality by way of his social instincts and family background. The second is the Bohemian period because of the desire for new experience and the lack of a definite social frame. And the third is the Philistine period because the desire for new experience gives place to the desire for security.

By studying Wladek's life history in terms of the theory of social personality, the authors show the typical personal evolution of the culturally passive mass which constitutes in every civilized society the enormous majority of the population. They believe that the Philistine is not suited for life in the modern society. They want to find a way to produce a creative individual who can adapt and be compatible to new situations, pursue a diversity of interests and also maintain a consistency of activity.

Der Wille zur Motorisierung: Automobil und Modernität im Nationalsozialismus

Daisuke TANO

In diesem Aufsatz geht es um die kulturelle Reichweite der Motorisierung im Dritten Reich. Den kulturpolitischen Grundzug des Nationalsozialismus hat J. Herf als »Reaktionäre Modernität« charakterisiert, d. h. als Mischung von reaktionärer Politik und technischer Modernität. Aber dieser Begriff ist irreführend, weil sich die Haltung der Nationalsozialisten zur Modernität nicht einfach als »reaktionär« definieren läßt. Eher sollte man den an sich ambivalenten Charakter der Moderne, der von D. Peukert